毎日新聞　平成23年6月8日（水）

四国健康ナビ

徳島大学病院心臓血管外科
藤本鋭貴さん

大動脈瘤患者に低侵襲治療を

最近、さまざまな手術の「低侵襲化」（痛みなどを少なくすること）が図られてきていますが、大動脈瘤治療においても、低侵襲治療が普及してきています。

大動脈瘤とは心臓から全身に血液を送る太い血管が風船のように膨らみ、放置しておくと裂ける可能性がある病気をいいます。従来、大動脈瘤治療は、破裂の危険性が高い大きさになると、おなかや胸を大きく切って、膨らんだ血管を人工血管で修復する人工血管置換術という手術方法が主流でした。

最近になって、おなかや胸を切らず、鼠径部（足の付け根）の小切開で、経カテーテル的に治療を行う「ステントグラフト内挿術」という手術方法が、人工血管置換術より優れているという短期成績が報告されて、普及するようになりました。この低侵襲手術により、術後は翌日から食事摂取や歩行が可能になり、退院時には入院時とほぼ同じ状態で退院できるようになりました。

しかし、このステントグラフト治療をするには、術前の綿密な治療計画が必要で、従来の人工血管置換術よりも、より良い治療成績を得るために、その治療にあたる医師は十分経験を積んだ専門の医師に限定されています。

当院では、今年4月から大動脈瘤に対するステントグラフト治療の専門医が着任し、大動脈・血管治療専門外来を開設いたしました。当外来では、大動脈瘤患者に対しては、少しでも体に負担が少なく、また、術後安心して生活していただけるように、低侵襲で質の高い手術を提供できるよう心掛けています。また、血管疾患に対しては、カテーテル治療を積極的に行い、できるだけ体にメスを入れないように取り組んでいます。

「大動脈瘤では？」と心配な人や大動脈瘤と診断された人、大動脈瘤と診断され、大きく切る手術をしなければならないと言われた人、そのほか、血管疾患でお悩みの人、ぜひとも一度、当院の大動脈・血管治療専門外来にお気軽にご相談ください。